

長征途上の一九三五年、中国共産党選挙会議で党内指導権を確立して以来四十年余、つねに世界を驚かし、ひっかきまわってきた巨星・毛沢東がついに天寿を全うした。北京の人民大会堂では閉閉式が行われており、十七日まで内外の責任者、各界代表などが別れを

ついでる。毛沢東は、その存在意義があまりにも大きかっただけに八億五千万の中国民衆も、外部世界の人びとも、いずれこの日が来たることは十分に予想していたものの、いま、毛沢東の死を現実のものとしたとき、中国の将来の方向にたいし改めて不安を掻かぬ者は少ないであろう。この不安は、巨星の落ちた直後の当面の政治的かつ精神的な凝集力以上のものとして潜在しているのではなからうか。

多くの人びとは、去る七六年一月の周恩来総理の死のあと、走資派批判から天安門事件へと展開した中国の激動を想起するであろうが、この激動を処置することに成功したいいわゆる文革派の将来は、毛沢東なき今日、どう考えても長期的に安定し得ると思われな

とえに中国内政のこうした推移いかににかかっているといわれはならない。なぜなら、今日の中国にとってもっとも重大な意味をもつ中ソ関係にかんしていえば、中ソ対立の最大の要因は、まさに毛沢

中嶋 嶺雄

1976.9.13 (日) 信毎

毛主席なき中国外交

対日関係が重要課題

かぎり、中ソ関係の急激な改善は望めなければ、ソ連はすでにここ数年、毛沢東以後の時代の中国内部の変化、つまり従来とは異なった対右傾の潮流の台頭を大いに期待しており、そのようなリーダースhipの出現による中ソ関係の改善に希望をこないできた。それだけに当面、硬軟両極、あらゆる手段をへしこみ、とばかり積極的に対中戦略をすすめるであろう。そして、もしも中国内部に劉少奇、鄧小平タイプの新実権派のリーダースhipが出現すれば、周恩来路線に近い秀秀派リーダースhipが定着したときには、中ソ関係は大きく改善されるであろう。

このままの中ソ関係の変化は、中国にとっても一つの重大な国際関係である米中関係をも規定する。アメリカの世界戦略にとり、中ソの和解こそ最大の悪夢であるだけに、アメリカは、そのような中ソ関係の変化を阻止すべく、当面、従来以上に米中接近を深めるであろう。アメリカは、すでに一九七五年後半から顕在化し、同年十二月のフォード大統領による「新太平洋クワトロ」で明白になった米日・中の太平洋横断的連携(Trans Pacific Coalition)の基本戦略に従って、米中間の国交樹立と、さらに

援助への道へと歩み寄るかもしれない。

こうして中国は、毛沢東以後の当面の「空白」期に米ソ双方の外交的接近競争を受けとめる側に立つものと思われ、それだけ中国の外交的選択肢は拡大しよう。ただ、そのような選択の幅を有効に活用し得るためには、中国の内政上のリーダースhipが安定していなければならず、後継体制をめぐって混乱と動揺が続くならば、事態は予測しがたい方向へと発展するかもしれない。

こうしたなかで、中ソ関係は、わが国が中国をめぐる国際関係を戦略的に操作する立場にないだけに、中国にとって、より安定的かつ信頼度の高い外交関係として残るであろう。中国が、いわゆる「第三世界」外交重視の姿勢を維持するためにも、また北朝鮮、インドシナ三国などアジアの社会主義圏との外交関係を再調整するためにも、そしてASEAN諸国を中心とするアジア諸国との外交関係を深めてゆくに、やはり日中関係の安定は中国にとり、重要な課題たといえよう。

わが国としては、アジアの平和と安定のためにも、このような中国の要望に応えつつ、同時に中国内政の推移する方向をじつじつと見つめてゆかねばなるまい。

東個人の積年の対ソ不信にあったともいえるのであり、毛沢東の対ソ観は反ソ意識こそ、中ソ関係を規定してきた根拠でもあった。従って、後継リーダースhipがそのような毛沢東路線を継承する

(東京外語大助教)